

## 調査報告

## 連想法による情意的側面からの実習評価

## —基礎看護学実習Ⅰの評価—

辻 慶子・小堀 ゆかり・榊原 千佐子・中村 恵子

(2012年12月26日受稿)

**抄録：**本研究の目的は連想法調査を用いて基礎看護学実習Ⅰの実習評価を情意的側面から検討することである。今回の実習について「難しかったところ—易しかったところ」、「面白かったところ—面白くなかったところ」などの刺激語を用い、学生からの回答語を7つのカテゴリーに分類し、実習指導改善のための評価を行った。その結果、学生は受持ち患者の援助（M）は「難しいけど面白い」し「深まった」と感じていた。「難しい」「面白い」「深まった」ともに回答語が最も多かったのはコミュニケーションであり、学生にとって実習のイメージは患者とのコミュニケーションであった。

## Ⅰ. はじめに

本学の基礎看護学実習はこれまで2年生2月に看護過程の展開を目的として実施してきた。平成24年度は看護学科開設5年目を迎えカリキュラムの見直しを行い、基礎看護学実習をⅠ・Ⅱと段階を踏むこととした。その背景には、文部省（当時）の平成7年度版「我が国の文教施策」<sup>1)</sup>の中で医学部のカリキュラムや教育方法の改善として「アーリー・エクスポージャー（早期体験学習）」の導入を推奨していたことを受け、看護基礎教育でも導入されていること<sup>2) - 7)</sup>、そして看護の臨床の場面にふれ、患者や看護実践の様子を見学し、看護に対するイメージを膨らませ、看護の学習の動機づけとしたいというねらいがあった。

平成24度9月に基礎看護学実習Ⅰを実施した。実習後に杉森と舟島<sup>8)</sup>の看護学実習評価をもとにアンケート調査をおこなった。その結果では、「オリエンテーション」「人間関係」「指導内容」「実習記録」など5段階評価で平均4以上、「学習内容/方法」平均3.8であった。また学生の実習報告会での発表においても実習後は多くのことを学んで

きており、実習目的を達成できたと考える。しかし、初めての実習で学生が、教員・指導者が伝えたいとする知識や概念を獲得できているのか、実習方法は妥当なものであったか、知識や概念の獲得にどのように影響をあたえたかを把握することは、初期看護学実習の指導方法について具体的に何を改善すれば良いのか検討していくために役立つ資料となる。そこで、糸山と上園<sup>9)</sup>、糸山<sup>10)</sup>の連想法を用いて実習評価をおこなった。その結果を情意ベクトルを用いて表現し、知識や概念がどのように獲得され、実習方法を学生がどのように感じているのかを考察したので報告する。

## Ⅱ. 調査方法

1. 対象：A大学看護学科 1年生 96名
2. 調査時期：平成24年9月（基礎看護学実習Ⅰ終了後）
3. 調査方法：連想法調査

提示語として、「（実習で）難しかったところ」—「（実習で）易しかったところ」「（実習で）面白かったところ」—「（実習で）面白くなかつ

たところ」「(実習で)深まったところ」-「(実習で)深まらなかったところ」の対語を用いた。各提示語に対して50秒間で思い浮かんだ言葉(回答語)を所定の調査用紙に書くように指示した。回答で得られた回答語は、情意ベクトルとして示すために、次のような7つのカテゴリーに分類する。

4. 分析: 得られた回答語を情意ベクトルとして表すために次のカテゴリーに分類した。このカテゴリーは、糸山<sup>10)</sup>が「授業とは、授業者や学習者を含めた環境(学習環境: E)の中で、授業者が適当と考えた指導法(学習指導法: I)に従い、具体的な事例や資料、器具など(学習用素材)を通して、授業者が伝えようとする(学習者側から見れば獲得するであろう)教科専門領域のある内容(知識や概念)(学習概念: CK)を伝えること」であると規定し、授業評価の要因を一部看護学実習に適するように変更したものである。1つの提示語に対して学生が複数回答するため、各カテゴリーの中に1人の学生の回答が複数含まれることになる。

- ・概念および知識に関すること(以下CKとする)
- ・受持患者の援助(以下Mとする)
- ・一般的活動(以下Aとする)
- ・指導法(含指導者)に関すること(以下Iとする)
- ・学習環境に関すること(以下Eとする)
- ・その他(以下Oとする)
- ・無反応(以下Nとする)

5. 倫理的配慮: 調査の目的, 方法, プライバシー保護, 成績には関係ないことの説明を口頭で行い, 同意を得られた者のみに調査を実施した。

6. 基礎看護学実習 I の実習内容

1) 実習目的: 看護の実践場面を通して, 健康問題を持つ対象者の病気や療養生活に伴う思いや考えを理解し, 看護者としての基本的姿勢を学ぶ。

2) 実習期間・スケジュール:

平成24年9月10日-9月14日

- (1) 初日: オリエンテーション(学内)
- (2) 2日目-4日目: 臨床実習
- (3) 5日目: 実習報告会とまとめ(学内)

3) 実習方法

- (1) 原則として学生1名が患者1名を受け持つ。
- (2) 対象者の療養生活や看護者が行なう看護を見学する。
- (3) 承諾の得られた患者1名を受持ち, 関わりや必要な援助を指導者の下で見学または実施する。
- (4) 実習施設: 8施設

7. 結果の処理<sup>9)</sup>

回答語を分類しそれぞれのカテゴリーに入る回答語の総数を求めた。CKのカテゴリーに関する総回答語数を $N_C$ , Aのカテゴリーに関する総回答語数を $N_A$ のように表わす。更に $N_C$ の中で提示語「面白かったところ」「面白くなかったところ」「難しかったところ」「易しかったところ」の総回答語数を $N_C(\text{Interest})$ ,  $N_C(\text{Uninterest})$ ,  $N_C(\text{Difficult})$ ,  $N_C(\text{Easy})$ の様に示す。対象者総数 $M$ とし, 「面白かったところ」と「面白くなかったところ」の差及び「難しかったところ」の差に対するそれぞれの対象者に対する割合を算出する。即ち,

$$\left. \begin{array}{l} \{N_C(\text{Difficult}) - N_C(\text{Easy})\} \times 100/M \\ \{N_A(\text{Difficult}) - N_A(\text{Easy})\} \times 100/M \\ \cdot \\ \cdot \\ \{N_E(\text{Difficult}) - N_E(\text{Easy})\} \times 100/M \end{array} \right\} (1)$$

$$\left. \begin{array}{l} \{N_C(\text{Interest}) - N_C(\text{Uninterest})\} \times 100/M \\ \{N_A(\text{Interest}) - N_A(\text{Uninterest})\} \times 100/M \\ \cdot \\ \cdot \\ \{N_E(\text{Interest}) - N_E(\text{Uninterest})\} \times 100/M \end{array} \right\} (2)$$

を求め, 授業によって学習者が獲得するであろう知識・概念( $CK'$ )を表す $CK = f(C, M, I, E)$

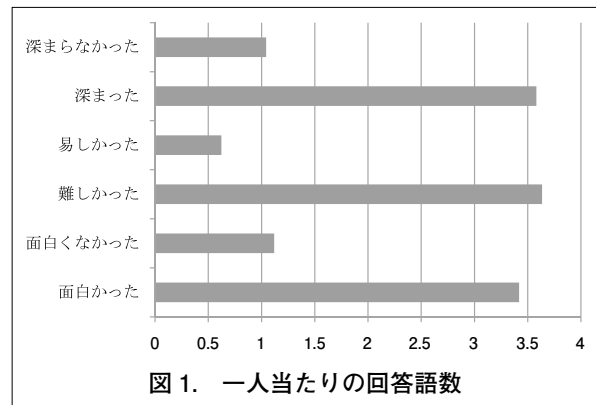
の式及び式 (1) で得た値を二次元空間上にプロットし、原点から各点への矢印の線を引けば、「面白かったところ」－「面白くなかったところ」及び「難しかったところ」－「易しかったところ」に対する情意ベクトルが完成する (図2参照)。このときこれらの軸で区切られた各象限のうち第1象限は「難しかったところ」－「面白かったところ」の領域を作ることができる。即ち「難しかったけど、面白かった」としてどのようなものがあるかを示すことができることになる。第2,3,4象限はそれぞれ「易しくて、面白かったこと」「易しくて、面白くなかったこと」「難しく、面白くなかったこと」を示すことができる。

また $CK=f(C, M, I, E)$ の式及び式 (2) で得た値をX軸に、「深まったところ」や「役に立ったところ」の回答語数をY軸に表せば、例えば「難しかったけど、深まった」や「面白くて、役に立ったこと」がどのようなものであるかなど、他の情意面の評価が可能となる。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 刺激語別の回答語数

回収率96.9% (93名) であった。各刺激語の回答語総数は「面白かったところ」318語、「面白くなかったところ」104語、「難しかったところ」338語、「易しかったところ」109語、「深まったところ」333語、「深まらなかったところ」97語であった (表1)。1人当りの平均回答語数 (図1) が最も多いのは「難しかったところ」と「深まったところ」3.6語、次いで「面白かったところ」3.4語、「易しかったところ」1.2語、「面白くなかったところ」1.1語、「深まらなかったところ」1.0



語、の順であった。6つの刺激語に対する回答語を、CK・M・A・I・E・O・Nの7つのカテゴリに分類した (表2)。回答語で最も多かったのが「難しいところ」、「面白いところ」、「深まったところ」もすべて患者とのコミュニケーションに関する表現であった。

#### 2. 全体的な情意ベクトルと実習評価

表2は「難しかった (Difficult) －易しかった (Easy)」と「面白かった (Interesting) －面白くなかった (Uninteresting)」「深まった (Deepen) －深まらなかった (Not deepen)」の各カテゴリに対する回答語数を示したものである。また、図2は学生の実習に対する全体的な情意ベクトルを示したものである。今回、OとNに関しての回答語は除いた。

図2に示すようにCKは「難しい－面白い」の象限上に「面白い」側に傾いて現れている。MとAは、「面白い」側に傾いて現れている。表2および図2に示すようにCKの獲得に関しては、学生数93名のうち、「易しかった (Easy)」に対する回答語数は1語 (1人当りの回答語数は0.01語) で、「難しかった (Difficult)」の回答語数30語 (1人当りの回答語数は0.32語) であったことから、「難

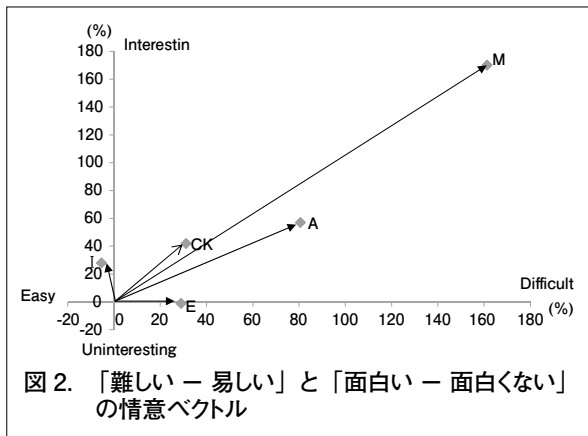
表 1. 回答語総数

	Difficult	Easy	Interesting	Uninteresting	Deepen	Not deepen
回答語総数	338	109	318	104	333	97
1人当りの回答語数	3.6	1.2	3.4	1.1	3.6	1.0
語種総数	243	39	231	52	285	31

(語)

表2. カテゴリー別回答語数

	Difficult (D)	Easy (E)	D-E	%	Interesting (I)	Uninteresting (U)	I-UI	%
回答語総数	338	109	318	104			333	97
1人当りの回答語数	3.6	1.2	3.4	1.1			3.6	1.0
語種総数	243	39	231	52			285	31
一般的活動 (A)	88	13	75	80.6	62	9	53	57.0
概念・知識 (CK)	30	1	29	31.2	41	3	39	41.9
学習環境 (E)	39	12	27	29.0	10	11	-1	-1.1
指導法 (I)	4	9	-5	-5.4	30	4	26	28.0
受持患者の援助 (M)	169	19	150	161.3	168	9	159	170.1
その他 (O)	8	4	4	4.3	5	4	1	1.1
無反応 (N)	0	51	-51	-54.8	2	64	-62	-66.7
	Deepen (D)	Not deepen (N)	D-N	%				
一般的活動 (A)	36	8	28	30.1				
概念・知識 (CK)	128	4	124	133.3				
学習環境 (E)	54	2	52	55.9				
指導法 (I)	25	3	22	23.7				
受持患者の援助 (M)	82	12	70	75.3				
その他 (O)	7	2	5	5.4				
無反応 (N)	1	66	-65	-69.9				

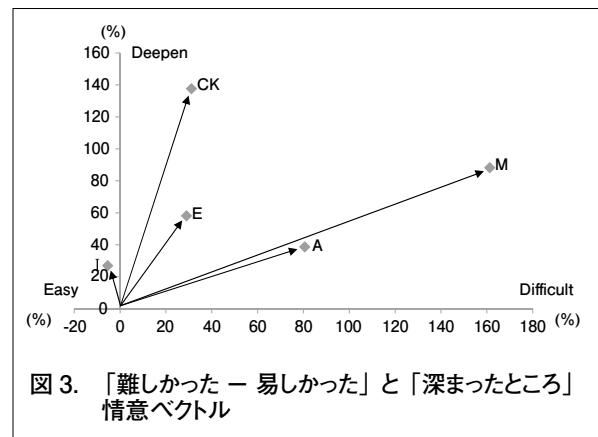


しかった (Difficult)」の回答語が31.2% ((30-1) ×100/93) みられた。「面白かった (Interesting)」の回答語数は41語(1人当りの回答語数は0.44語), 「面白くなかった (Uninteresting)」の回答語数は3語 (1人当りの回答語数は0.03語) で, 41.9%の回答語が面白かったところ側に見られた。同様に, Aを見ると, 「難しかった」に対する回答語が59.1%, 「面白かった」に対する回答語53.8%であった。Mでは, 「難しかった」に対する回答語が164.5%, 「面白かった」に対する回答語が

57.0%であった。これらのことより実習でのCKの獲得とMは「難しいけど面白い」ことを示している。指導法 (I) の回答語は易しい側に, 学習環境 (E) の回答語は難しい側に現れていた。

3. 「難しかった－易しかった」と「深まった」の情意ベクトル

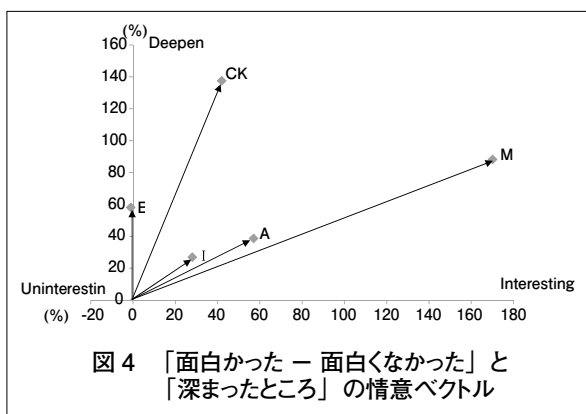
図3をみると, 実習に対するCKの回答語は「難しかった」31.2%「深まった」137.6%であった。CKで「難しかった」のは, 回答語から根拠, 次いで患者の気持ちの理解, アセスメント, 解剖学



的なこと、疾患の理解などであった。「深まった」内容はコミュニケーションの仕方・力、次いで環境整備の意味、根拠、患者の気持ちなどであった。Eの回答語は、「易しかった」27.7%、「深まった」53.8%であった。「難しかった」の回答語としては言葉使い、身だしなみ、見学などの時間配分などがみられた。「深まった」学習環境の詳細を見ると、グループ間のこと、態度のことであった。指導法 (I) に関して「深まった」という反応語は看護師モデルであった。

#### 4. 「面白かったー面白くなかった」と「深まった」の情意ベクトル

図4をみると、実習に対するCKは「面白かった」と41.9%の学生が感じていた。「面白かった」のは根拠を知ること、次いで新しい発見、わからないことがわかるようになったことなどであった。Eの回答語で「面白くなかった」は1.1%であった。「面白くなかった」のは記録物に関するものが最も多く、次いで態度に関すること、寝不足などの回答語がみられた。



## IV. 考 察

### 1. 実習全体を通して

1つの提示語に対する回答語数は、約70人の大学生を対象にした調査では約230～240語であると言われている<sup>11)</sup>。今回の6つの提示語での結果では糸山らの大学生の調査結果を大きく超えたのが、「面白かったところ」318語、「深まったところ」333語、「難しかったところ」338語であった。これは、実習は難しかったが、面白く、深まる学習形態であり、学生は実習を通して多くのことを学んでいると考えられる。さらに図2の実習に対する全体的な情意ベクトルや図3、図4から、学生は実習でCKは「難しいけど面白い」し「深まった」と感じていたと言える。平成14年度看護学教育の在り方に関する検討会報告書においても臨地実習の教育形態の重要性について述べている<sup>12)</sup>通り、実習という授業形態は、実習が初めての学生にとっても興味深いものであることが示唆された。

最も多い回答語が、「難しいところ」「面白いところ」「深まったところ」もすべて患者とのコミュニケーションであることは、学生にとって実習そのもののイメージが患者とのコミュニケーションであることが示唆された。また実習後のアンケートで、実習前の不安や実習中の悩みにおいても患者とのコミュニケーションをあげている。これらのことから学生の思考は患者とのコミュニケーションである。早期実習体験をすることで、学生の患者との相互関係に関する思考が明確になった。

糸山ら<sup>13)</sup>は、この連想法を用いて授業における獲得された概念や知識を測定することは、授業に擾乱をおこさないで測定することができるというおり、また矢口ら<sup>14)</sup>は「レポートには学習者が一番印象深く受け取ったもの、問題意識を強くもったものが表れる」と述べている。これらのことから、基礎看護学実習Iでの学生にとっての学びはコミュニケーションであり、今後の課題としてもコミュニケーションであることから、コミュニケーションに対する授業方法を改善していくことが示唆された。

2. 実習の「難しかったー易しかった」「深まったところ」ところ

「難しい」と感じている内容は、Mが最も

多かった。これまでの著者の実習に対する情意面の評価や糸山らの授業に対する情意面の評価では、CKの獲得が難しいという結果であった。初めて看護学生として患者に接し、何らかの援助をしたい、しかし援助できるものがないと考えている学生の傾向が示された。CKに対して「難しい」と感じている学生は31.6%であった。実習時期から考えると、援助には根拠が必要であると実感できるような講義がまだ少ないことも結果の要因であると考えられる。ほぼ見学実習であるが、見学後の振り返りの仕方を工夫し援助の意味を考える必要があることが示唆された。「易しい」のIでは、指導者との対応に対する回答語がみられ「優しい」と混同しているのではないかと思える表現がみられた。また図2、図3に示すように指導法は「易しく、面白く、深まった」ことを示している。このことは、教員・指導者においては、初めての実習という学生のレベルに応じた指導がなされていたことであり、また学生は看護師になる動機づけが強まったという回答語がみられたことから、指導者・看護師が学生に看護モデルを示してくれたことが窺える。

### 3. 実習の「面白かったー面白くなかった」「深まった」ところ

「面白かった」と感じている内容では、糸山と上園<sup>9)</sup>、糸山<sup>10)</sup>、平林ら<sup>15)</sup>のこれまでの授業に対する情意面の評価では学習用素材や学習指導法であった。著者らのこれまでの実習に対する情意面の評価と今回の調査においては、臨床で患者とかかわることで学習者自身が理解を深めるという学習プロセスが明確な学習方法を「面白い」と感じていた。「面白くなかった」ところでは、自己の未熟さからくる援助ができないこと、責任ある行動がとれないことなど行動面に関する表現が多かったことは、今の時点で学生自身ができること出来ないことを明確にしておき、自己を

客観的に見れるよう指導することが必要であるとともに、教員・指導者の助言を学生がどのように受け止めたのか、指導場面・状況は適切であったかなどの検討が必要であると考えられる。

臨床という学習環境において「深まる」と捉えており、臨床を学習の場として真摯に受けとめている姿勢が読み取れた。

## V. 結 論

基礎看護学実習Iにおける学生の情意面の評価を、連想法調査で行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 1人当りの回答語数が最も多いのは「難しかった」「深まった」次いで「面白かった」であった。
2. Mは「難しいけど面白い」し「深まった」と感じていた。
3. Eについては「難しいけど深まる」と感じていた。
4. 「難しい」「面白い」「深まった」では、コミュニケーションに関する回答語が最も多かった。
5. Aは「難しいけど面白い」し「役に立った」と感じていた。
6. E・Iについては「易しいけど面白くなかった」が「役に立った」と感じていた。

## 文 献

- 1) 文部省：我が国の文教施策。東京，大蔵省印刷局，1998。
- 2) 辻慶子，鷹居樹八子，半澤節子，石原和子：医学生と看護学生の合同演習前後での医師・看護師に対するイメージの変化。長崎大学医学部保健学科紀要，15（1）：69-74，2002。
- 3) 辻慶子，鷹居樹八子，中尾優子，岩永喜久子，田代隆良：看護学科・理学療法科・作業療法科学生の医療専門職に対するイメージの

- 変化－卒業生の講話とグループワークを通して－. 長崎大学医学部保健学科紀要, 14 (2): 115-123, 2001.
- 4) 浦田秀子, 鷹居樹八子, 辻慶子, 寺崎明美: 早期体験実習における対象理解と医療専門職の関わり－保健学科・医学科合同学習による学びの分析－. 日本看護研究学会第29回学術集会集録集: 338, 2003.
  - 5) 鷹居樹八子, 辻慶子, 浦田秀子, 寺崎明美: 保健学科・医学科合同学習による早期体験実習の学び, 日本看護学教育学会第13回学術集会集録集: 172, 2003.
  - 6) 浦田秀子, 鷹居樹八子, 辻慶子, 寺崎明美: 入学時の体験学習における学びの分析－医学科との合同学習によるチームの学び－. 第24回日本看護科学学会学術集会集: 421, 2004.
  - 7) 辻慶子, 鷹居樹八子, 浦田秀子, 寺崎明美: 早期体験実習における保健学科と医学科の相違点－医療の実際からの学びの分析－. 第14回日本医学看護学教育学会学術集会集. 24, 2004.
  - 8) 杉森みどり, 舟島なをみ: 看護教育学. 医学書院, 東京, 288, 2005.
  - 9) 糸山景大, 上蘭恒太郎: 連想法を用いた情意ベクトルによる授業評価. 長崎大学教育学部紀要教育科学, 67: 1-11, 2004.
  - 10) 糸山景大: 情意面の評価法として情意ベクトル図, 授業設計理論と授業評価法としての連想法調査. 54-55, 2003.
  - 11) 糸山景大, 藤木卓, 金崎良一, 上蘭恒太郎: 標本サイズの変化に対する連想における諸量の挙動. 信学技報: ET97-99, 1997.
  - 12) 文部科学省高等教育局医学教育課: 大学における看護実践能力の育成充実に向けて. 看護教育の在り方に関する検討会報告書, 2002.
  - 13) 糸山景大, 藤木卓, 金崎良一, 椿山健一: 情報論的手法を用いた教科教育学の研究と実践(その1)－教科教育学研究のモデル化と授業設計理論－, 平成7年度 日本教育大学協会研究集会集: 13-16, 1995.
  - 14) 矢口みどり, 大下静香, 大森武子: 学生のレポートから行動姿勢を読み取る, 能力開発工学センター紀要, (66), 430-434, 1998.
  - 15) 平林佳子, 後藤ヨシ子, 糸山景大: 連想調査による授業の情意的側面の授業評価－高校家庭科の授業評価－, 学校教育再生に資する授業学構築のための基礎研究(課題番号: 15530596), 平成15年度～17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, p48-56, 2006.

## The Emotional Viewpoint Evaluation on Clinical Practices by Association Method

TSUJI Keiko, KOHEI Yukari, SAKAKIBARA Chisako and NAKAMURA Keiko

**Abstract:** The purpose of this study is to evaluate the lecture of the Basic Nursing Practice I by the association method from the emotional point of view. We used “opposite word” pairs as the stimulus words, such as “difficult/easy” and “interest/uninterested”, to draw out responses from the students. Their responses were categorized into seven categories, and we evaluated them in order to improve this lecture. We found that students felt that the care for the patients was “difficult but interesting” and “deep” in clinical exercises. The clinical experience to the students was communication with patients, because that the most number of reply words concern with “difficult”, “interesting”, and “deep” was in communication.